

＜書 評＞

Carola Halhuber 著 川初 清典 訳
Max J. Halhuber 著 神原 啓文 訳

心筋梗塞とリハビリテーション (誰にでもわかる動脈硬化性心臓病の予防と治療)

木村彰男 (慶大月が瀬リハセンター)

近年、心筋梗塞および狭心症などの心疾患の増加に伴い、そのリハビリテーションの重要性が注目されるようになってきている。しかしながら、脳卒中、脊髄損傷などに比べ、心臓のリハビリに対する関心は、まだまだの感がある。その意味で本書はタイミングよく出版されたといえる。

本書は「誰にでもわかる動脈硬化性心臓病の予防と治療」という副題からもわかるように、決して医療スタッフを対象に書かれたものではなく、実際の患者さんに対する病気の啓蒙と自己管理をその目的としてい

る。取り上げられている事項は、長年、心疾患の治療にたずさわっている二人の著者が、臨床の場で患者さんから質問を受けた事柄ばかりで、それらに答える形で話が進められている。

全体は11章より成り、前半は心疾患の概説が中心で、危険因子、診断、治療などについてわかり易く説明がされている。患者さんばかりでなく、心筋梗塞が発生した際の配偶者、家族が何をすべきか、などについても述べられており、極めて実践的な本といえる。後半ではかなりのスペースをさいて、リハビリについて言

及しているが、運動療法、理学療法はもち論のこと、リハビリを受けるための法的問題、心筋梗塞に陥った後の“人生学習”など、その内容は多岐にわたっている。

平易で気軽に読める本であるが、ドイツの現状に沿って書かれているため、法的問題などは日本の制度とは異なり、理解しにくい部分もある。その点、訳者は適宜訳注を加え、解説に努めている。二人の訳者も著者同様、心筋梗塞の患者さんの治療に常日頃活躍されている方々で、ドイツ語を日本の患者さん達へ判り易く訳す、という難しい仕事への多大な努力のあとがしのばれる。

本書が対象としている患者さんと言うに及ばず、日常心疾患を扱っているリハビリの各分野の医療スタッフにも、大いに参考になる本といえる。

(A 5, 頁 188, 1984, ￥2,500,
杏林書院 刊)